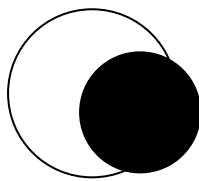


平成 20 年度事業報告



ひとはくトピックス 2008

1

「ひとはく恐竜ラボ」オープン！

間近に見られる化石クリーニング

平成 18 年に丹波市山南町上滝の篠山川河川敷で大型草食恐竜の化石が発見され、その後第一次・第二次の発掘調査により、尾椎や肋骨、環椎、歯など多数の化石が確認された。これらの化石は、発掘時には岩石に覆われているため、エアチゼルなどの道具を使って覆っている岩石を削り、化石を露出させる必要がある。この作業は化石クリーニングと呼ばれ、非常に繊細で高度な技術を要する。このクリーニング作業を迅速かつ効率的に進めるため、新しく「ひとはく恐竜ラボ」が開設された。

平成 20 年 4 月 20 日、井戸知事をはじめ、第一発見者の村上茂氏や丹波市長、発掘の関係者ほか、多数の一般来館者の見守るなか、恐竜ラボはオープンした。ラボの広さは約 260 平方メートルあり、クリーニング作業をする部屋と化石の発掘経過を説明するパネルや化石レプリカ等を展示するホー



ルとがある。展示ホールとクリーニング室はガラスで仕切られており、ガラス越しに研究人员らによるクリーニング作業を間近に見ることができる。施設は無料開放しており、博物館の開館日には自由に見学できるようになっている。毎週日曜日には研究員が発掘の様子やクリーニング作業を分かりやすく解説するなど普及事業にも努め、今年度のラボへの入館者数は 4 万人を超えた。

昨年度、丹波市山南町に恐竜ラボ山南ルームが先にオープンしている。今回の新しいラボ開設によってクリーニングがさらに効率的に進められるようになり、今後の恐竜研究の成果が大いに期待される。

2

G8 環境大臣会合開催記念シンポジウムを ひとはくで開催

4月26日に「アジアからの発信～人と自然の共生のみちをさぐる」とサブタイトルを付した標記シンポジウムをひとはくホロンピアホールにおいて、環境省との共催で開催しました。日本の里山に代表される持続的な資源利用と生物多様性保全を「SAYOYAMA」として国際発信することを目的として開催したもので、全国から400名の参加者をえて2題の基調講演（国連大学高等研究所いしかわ国際協力研究機構所長 **Alphonse Kambu** 氏とひとはくの服部保研究部長）と6件の事例報告（うち3件は国外から）がおこなわれました。なかでも服部研究部長による「日本の里山が人の営みとのかかわりのなかで生まれ（進化し）維持されてきたこと」を伝える講演、兵庫県豊かな森づくり課の浦杉圭作氏による「ひょうご方式による里山管理」の実例報告が参加者の強い関心をよびました。また井戸知事もかけつけ、国内外からの参加者に歓迎の熱いメッセージを届けました。

続いておこなわれたパネルディスカッション（座長：岩槻邦男館長）および翌27日午前開催の国際ワークショップでは、人は自然の一部であるというのがアジア共通の自然観であること、SATOYAMA概念が生物多様性保全のみならず文化・社会・経済的にも大きな意味をもっていること、SATOYAMAは日本では奥山を、アジアではそれぞれの「聖なる地域」を背後に有していることが重要な意味をもつこと、これら異なった生態系間の関係を明らかにすることが重要課題であることなどが熱っぽく論議されました。27日午後には菊炭で有名な川西黒川の里山のエクスカージョンがおこなわれ、国内外からの参加者が日本の伝統的な里山景観を堪能し、今後国際的な連携をとりながら生物多様性保全にとりくむ方向性を浦杉圭作氏が確認されました。



3

フェアブル大作戦！多彩な催しにより、 多数の来館者を迎えた

「フェアブル昆虫記」最終巻の刊行 100 周年を記念して、日本の自然史系博物館 5 館とフランス国立自然史博物館との共同により巡回展「フェアブルにまなぶ」が企画され、昨年から全国を巡回してきた。ひとはくは国内最後の会場として、平成 20 年 9 月 20 日から 11 月 30 日までこの巡回展を開催した。これに併せて兵庫県の地域展として、虫や自然を愛した兵庫ゆかりの偉人たちを紹介する「兵庫のナチュラリストたち」や、昆虫の不思議を遊びながら体験できる「昆虫不思議ラボ」、県民の観察・発見を公募展示する「ひょうごのフェアブル・未来のフェアブル」などを同時開催した。さらに、会期中に館内外で 250 以上のセミナー・イベント類を実施し、ひとはく全体がフェアブルー色となる「ひとはくフェアブル大作戦！」として展開した。



期間中の総ビジター数は 74,409 人にのぼり、例年の同時期よりも 2 割程度増加した。なかでも学校団体が多く、全部で 132 校 11,930 人が来館した。その半数以上の児童生徒に対し、身近な生き物の観察やフェアブル昆虫記に登場する動植物をテーマに、研究員が実物やスライドを使って楽しくわかりやすく話をする「ひとはく博士のフェアブルトーク」を実施し、好評を得た。

今回、公募による参加型展示や、美術館や植物館という異分野の施設との共催展示など、通常の企画展とは異なる新しい展示形態を取り入れ、また「新たな人と自然の博物館基本計画」で示されたソフト先行事業の一環として、学校団体向けフェアブルトーク、ふぁーぶる講談など多彩な演示プログラム、ふぁーぶるポイントカードなど、さまざまな新しい試みを実施して初の有料特別展示の来館者数確保に対処した。

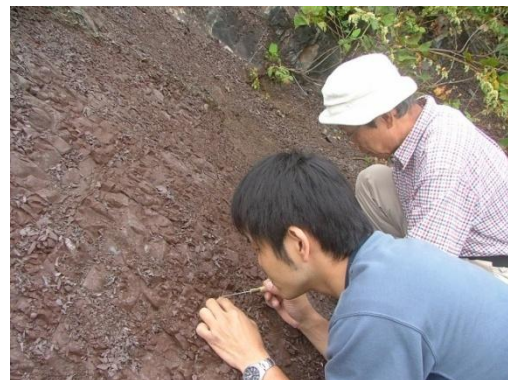


4

篠山の哺乳類・恐竜化石、相次ぎ発見！

丹波市の恐竜化石を含む地層である篠山層群は、その名が示すように篠山の盆地に広く分布している。こうしたことから、篠山からの恐竜の化石発見に対する期待が丹波市の恐竜化石発見以後急速に高まったが、それは市内 2 か所からの化石発見という形で早くも現実のものとなった。2007 年 10 月に丹波市の恐竜化石発見者の一人である足立 洸氏により小型脊椎動物化石産地が発見され 2008 年 5 月に発掘が行われた。その結果、小型の恐竜やトカゲの化石と一緒に哺乳類の下あごの化石が発見された。この哺乳類化石は我々の祖先が恐竜全盛時代にどのような姿をしていたかを教えてくれる貴重な資料である。同年 7 月にはさらにもうひとつ恐竜化石産地が篠山市内に加わった。市立大山小学校の酒井教諭による総合学習の授業中に、実習場所である大山下の篠山川河床で子供たちが獣脚類の歯を発見したのである。児童による発見ということでさらに夢を与えてくれるニュースとなった。

写真 篠山市内の小型脊椎動物化石産地で発掘をする発見者の足立氏（右）と池田研究員（左）



5

恐竜化石第三次発掘で肉食恐竜の歯、 見つかる

2008年12月から2009年3月にかけて、恐竜化石の第三次発掘が丹波市山南町上滝の篠山川河床において行われた。この恐竜の化石は2006年に地元丹波市在住の村上茂・足立洸両氏によって発見されたものであり、2007年および2008年の冬季に行われたこれまでの発掘で、首が長い大型の恐竜である竜脚類の尾、腰、胴体の骨が発見されている。第三次発掘では竜脚類の首や足の骨の発見が期待されたが、これらの発見は残念ながら次期発掘以降までお預けとなった。しかし、今回の発掘では竜脚類の歯が多数発見され、これまで不明であった特徴が明らかとなった。また、これまでの発掘では竜脚類以外の化石の発見が少なかったが、第三次発掘では他の種類の恐竜の歯が密集して埋まっている部分が発掘区画の一部に現れ、竜脚類と共存した動物相全体を知る手がかりが出てきた。この歯の密集部分は未発掘部分にも続いていると考えられ、様々な恐竜が今後発見される可能性がある。

写真： 第三次発掘で発見された獣脚類(肉食恐竜)の歯。長さ5cmとこれまでで最大



6

「共生のひろば」の内容がますます充実。

発表数は 47 件、聴講者は 300 人に！

人と自然の博物館では毎年 2 月 11 日に、各地域でひとはくの研究者と連携して様々な活動を行っているグループや個人による日頃の研究・活動の成果を発表する場として、「共生のひろば」を開催している。今年で第 4 回を迎え、19 件の口頭発表と 27 件のポスター・作品が出展され、総勢 300 名の参加者が集まり互いの成果についての情報交換を行った。発表会後の茶話会で行われた表彰式では、例年の館長賞、名誉館長賞に加え、審査員特別賞と会場からの投票によって決まる会場注目大賞も授与され、受賞者は多くの参加者からの拍手を浴びていた(下表参照)。またポスター・作品については、本年度初の試みとして当館 2 階の企画展示室において 2 月 15 日から 4 月 5 日に実施した「共生のひろば展」にて展示し、2 月 11 日に訪れることができなかつた多くの来館者にも情報発信する場を提供した。

第 4 回 共生のひろば 受賞者一覧

館長賞	口頭	マーキング調査で得られたミヤマアカネの周年経過と行動に関する知見	横田 靖 (ひとはく連携活動グループ あかねちゃんクラブ, 池田・人と自然の会)
	口頭	さんぼは自然体験のはじまり!	西浦睦子・鈴木久代 (ひとはく連携活動グループ NPO 法人さんぼくらぶ)
	ポスター	ハヤブサの落とし物 (Part 4)	溝田浩美 (ひとはく地域研究員)
		課題研究報告「森から学ぶ～六甲山系のキノコたち」	藤井日菜子・濱田 諒・稲垣恵理・梅田侑希 ほか第 2 学年 20 名 教諭 河合祐介・上林 泰 (兵庫県立御影高等学校)
名誉館長賞	口頭	ソーラーパネルと小型ポンプを用いた簡易魚道の設置～安価で簡便な自然再生の方法～	久加朋子・大澤剛士・石田裕子・佐々木宏展・前田知己・清水洋平 (ひとはく連携活動グループ 水辺のフィールドミュージアム研究会)
	口頭	「恐竜発掘ケーキをつくろう!～お菓子を通した学習プログラムの可能性を探る～」	有田寛之・高橋みどり (国立科学博物館)・佐藤大樹・川本麻代・小島綾子・古杉理沙子・鮫島裕子・古満れんげ (兵庫県立三田祥雲館高等学校)・辰巳萌佑子・三浦理紗 (大阪教育大学附属池田中学校)・松浦孝一 (ル・パティシエ・プチ・ムッシュ)
	ポスター	鳴く虫ワールド 2008	ひとはく連携活動グループ 鳴く虫研究会「きんひばり」
	ポスター	ミヤマアカネを卵から観察「血統書付き!あかねちゃん誕生」	浅倉景子 (ひとはく連携活動グループ あかねちゃんクラブ)
審査員特別賞	口頭	コンクリートの川にホテルを増やそう～池尻川ホテル再生計画～	山下駿・野澤眞崇・坊沙織・山本貴之・和田彬宏・佐藤飛鳥・土居恭子 (兵庫県立有馬高等学校科学部)
	口頭 ポスター	スクール ジーンファーム 地域の絶滅危惧種の保全と増殖	朴木彩乃・森元敏郎・顧問 田村 統 (兵庫県立大学附属高等学校 自然科学部 生物班)
	ポスター	木の実・草の実・野菜の種大集合	井上富雄・中島得三 (NPO 法人 人と自然の会 植物観察会)
会場注目大賞	口頭	コンクリートの川にホテルを増やそう～池尻川ホテル再生計画～	山下駿・野澤眞崇・坊沙織・山本貴之・和田彬宏・佐藤飛鳥・土居恭子 (兵庫県立有馬高等学校科学部)
	ポスター	ハヤブサの落とし物 (Part 4)	溝田浩美 (ひとはく地域研究員)
	ポスター	木の実・草の実・野菜の種大集合	井上富雄・中島得三 (NPO 法人 人と自然の会 植物観察会)

7

ひとはくで学んだ大学院第1期生が修了

ひとはくに大学院ができてちょうど2年、入学した8名の学生全員が無事に兵庫県立大学修士の学位（環境人間学）を取得して、社会にはばたき、あるいは職場にもどっていきました。彼らは、よその大学院とは一味違って、さまざまな分野領域の教員・研究員・地域研究員・連携グループの方々、そして市民とかかわりあいながら「人と自然の共生」を学び、行動することにより学位を授与されたものです。今後もひとはくと強い絆でむすばれ、社会で活躍していくに違いありません。彼らの修士論文タイトルは以下のものであり、ひとはくの教育研究の幅の広さと深さを示してくれています。「日本ジカ（*Cervus Nippon*）採食圧下にあるヒノキ人工林伐採跡地を広葉樹林に転換する方法の検討」、「水田におけるケリの繁殖戦略－田園鳥類の保全研究」、「遺伝子系統解析を用いた日本産イグサ科植物の分類学的再検討」、「兵庫県内小学校における環境学習の実態とその改善に関する研究」、「兵庫県南部、瀬戸内沿岸域における環境変動史の解明～海洋酸素同位体ステージ7の相対的海水準変動について～」、「多自然居住地域の限界集落における集落移転に関する研究」、「インドネシア・ジャカルタにおける屋外空間の利用実態とその役割－住宅に付随するテラスを中心として－」

ちなみに来年度は6名の修士1年生と8名の修士2年生がひとはくで学ぶ予定になっています。



8

生物多様性ひょうご戦略の策定に参画

兵庫県は、兵庫県下の生物多様性の保全と持続可能な利用を効果的に進め、生物とのよりよい関係を築くための指針である、「生物多様性ひょうご戦略」の策定作業を、平成 20 年度 4 月より自然環境課が中心となってすすめてきた。戦略の策定にあたっては、当館から岩槻邦男 館長、中瀬 勲 副館長、服部 保 自然・環境再生研究部・部長が策定委員として参画したほか、多くの研究員が策定委員会事務局や戦略の部分執筆にかかわり、平成 21 年 3 月に策定が完了した。

この戦略では、これまでの県の取組をふりかえり、今までに足りなかった県庁内部局間の連携や市民・NPOの活動への支援をスムーズに行えるよう、生態系レッドデータブックや外来生物ブラックリストなどの生物多様性に関する公開情報の充実をはかり、市民から行政まで生物多様性に関する事業の相談をすることのできる生物多様性アドバイザー制度をはじめとする様々な制度を整えることを目指している。平成 22 年度には第 10 回生物多様性条約締約国会議（COP 10）が日本で開催されることから、生物多様性に関する関心度も高まりつつあり、当館も今後はひょうご戦略の内容を踏まえた活動の実施が求められている。

9

「自然の再生と共生国際フォーラム in 淡路夢舞台 ～フランス・アベロン県と兵庫県の地域づくり～」開催

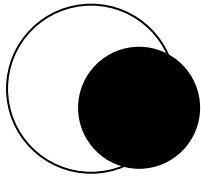
10/4（土）に、人と自然の博物館と（財）淡路花博記念事業協会の主催で、「自然の再生と共生国際フォーラム in 淡路夢舞台」を開催した。

フォーラム前日には、兵庫県の準姉妹県であるフランス・アベロン県からピエール・マリー・ブランケさん（アベロン県議会副議長）とヤスミン・ママさん（マイクロポリス昆虫博物館館長）が来日され、井戸敏三兵庫県知事を表敬訪問された。

フォーラム当日は約 500 名もの方々がお越しになり、熱心にフランスからのゲストお二人、井戸知事、作家の玉岡かおるさんの話を聞かれた。後半のパネルトークには俳優の山口崇さんにも出演いただき、民話研究家かつ淡路出身者としてこれからの淡路島へ提言をいただいた。フォーラム全体としては、生活に根ざした自然こそ大切にすべきで、地域にお住まいの方々の活躍によって環境も生活もより良くしていく必要があることなど議論された。

10/5（日）はフランスゲストのお二人を連れ、人と自然の博物館の「ひとくフェアブル大作戦！」を案内した後、博物館のエントランスホール横に記念植樹をして「開催記念植樹の証」も交わした。植えたのは、兵庫県産貴重種のヘラノキ（*Tilia kiusiana*）。この仲間フランスにも自生種がみられる。またこの樹は、大きく育ち花には虫が来てフェアブルに似合うものである。





平成 20 年度のタスクフォース事業報告

タスクフォース（組織群）について

従来の組織群とは別に平成 20 年度から導入した組織群である。各タスクフォースは、短期の課題を達成するために結成したものである。構成員は、リーダーおよびサブリーダー、その他であり、人員は、実情に応じて年度途中でも変更可能にしている。また、新たなタスクフォースを発足できるようにしている。

平成 20 年度は、9 つのタスクフォース（生物多様性、恐竜・化石、フェアブル展推進、マーケティング、グローバル・プログラム、環境学習推進、博物館ネットワーク構築、情報システム更新、フェスティバル）が結成された。

■ 生物多様性 タスクフォース

（１）「生物多様性ひょうご戦略」の策定への支援

兵庫県の進める「生物多様性ひょうご戦略」の策定（担当部局：農政環境部環境創造局 自然環境課）に対して全面的な協力を行った。「生物多様性ひょうご戦略」は、平成 21 年 3 月に策定された。

■ 恐竜・化石タスクフォース

（１）化石発掘の実施

1) 上久下地区第三次発掘の実施：L字型 25 m²

・竜脚類の歯 6 点・肋骨 6 点・骨片多数、獣脚類の歯 10 点以上、鳥脚類の歯 20 点以上、その他小動物の骨片を発掘

・化石発掘状況から、予想以上に化石が拡散して埋蔵されていることが判明

2) 篠山市での小型脊椎動物化石の発掘

・哺乳類・有鱗類・小型鳥盤類を含む化石多数

（２）化石クリーニング作業の進展

・ひとはく恐竜ラボの開設・供用開始（4/20）：ひとはく恐竜ラボと山南ルームの合計ビジター数=68,656 人

・合計 27 部位（尾椎 18 点、血道弓 9 点）のクリーニング完了

・第二次発掘産状レプリカの製作 1 点

（３）恐竜化石を活かした教育普及活動の充実

・丹波竜フェスティバル 2008(丹波市山南住民センター)の実施(5/3～5)：参加者数=4,339 人

・第二次発掘速報展（ひとはく）の実施（4/20～6/1）

・ようこそ恐竜ラボへ！（大阪自然史博物館）の出展（4/26～5/18）

・環境フェア in KOBE への出展（5/23～26）

・臨時展示「篠山市の小型脊椎動物化石速報展」の実施（6/15～29）

・ひとはくセミナー「兵庫の恐竜」の実施（7/11） 50 名

・臨時展示「丹波の恐竜化石～夏休み期間特別展示」の実施（7/20～8/31）

- ・丹波市主催「丹波竜サマーキッズスクール」での展示・体験教室の実施協力（8/7～10）
- ・ひとはく恐竜ラボでの研究員による解説実演（毎週日曜日）
- ・ひとはくフェスティバルで恐竜〇×クイズなど実施
- ・NHK 神戸放送局ほか主催「自然のたからもの～丹波竜&コウノトリに会おう！」（大丸ミュージアム）共催展示の実施（1/7～12） ビジター数=10,106人

（４）関係した丹波市等地元との協議会など

- ・丹波恐竜化石発掘等連絡調整協議会
- ・丹波恐竜化石発掘等連絡調整部会
- ・恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくりプロジェクト（ワーキング）
- ・篠山市脊椎動物化石保護・活用委員会

（５）三田炭獣を活かした教育普及活動

- ・三田市内中学生（トライやるウィーク）による化石公園の整備（6/13）
- ・三田市小学校理科部会との連携による、三田化石公園を使った研究授業「キッズコース 大地のつくり」（小学6年）の実施（1/21,22,28）

■ ファーブル展推進 タスクフォース

（１）展示方式の新展開

- ・巡回展「ファーブルにまなぶ」、兵庫地域展、ソフト展開をあわせて「ひとはくファーブル大作戦！」をホロンピアホールからエントランスまで、館全体をつかって展示展開
- ・大人向けの展示部分（ファーブルにまなぶ展・兵庫のナチュラリスト）と子ども向けのハンズオン展示部分（企画展示室昆虫不思議ラボ）を設置し、幅広い観覧者層に対応
- ・参加型展示の実施： a) 出展を一般募集した参加型展示「未来のファーブル」を実施：出展数 328 点、出展者の居住地=6 府県、35 市郡にわたった、b) 県下小学校にチョウの塗り絵を配布し、小学生 100 人のチョウの塗り絵を展示した
- ・国立科博、北九州博、琵琶湖博、北大博、フランス国立博物館（巡回展部分）や宝塚市手塚治虫館、伊丹市昆虫館、京都大学博物館、千葉県立中央博（地域展部分）との共同展示制作の実施
- ・館外での演展示の実施： 県立奇跡の星の植物館とのコラボ展 2 回；県立美術館との共催展示 1 回；有馬富士フェスティバル 2 回；フローラ 88 で演展示 2 回；中兵庫信金ウッディタウン支店で演展示 1 回 ほか

（２）新広報システムの実施

- ・新規団体誘致（ファーブルトークの実施、わくわくオーケストラの中学校への PR）や既来館者への PR 強化（夏期教職員セミナー受講教員への PR、来館実績のある子供会への PR、神戸地区の全児童へのプログラム配布）
- ・ふぁーぶるポイントカード： 来館時スタンプ収集者にプレゼント進呈
- ・神戸新聞社 110 周年事業との共催等マスコミ対応の強化（新聞記事 4 2 件、テレビ放映 2 回等）

（３）演示プログラムの充実

- ・イベント・セミナー：既存のプログラム以外に 25 件を実施
- ・ファーブルトーク：87 回、5,935 人の児童生徒等にミニレクチャーを実施
- ・兵庫地域展共催館による「生き虫」を使ったイベントなど、人博のメニューにはないセミナー

一を実施

(4) 国際シンポジウムの実施：フランス・アヴェロン県との国際交流事業の実現

- ・財団法人淡路花博記念事業協会と共催で、10/4 に国際フォーラムを開催
- ・当日の参加者は約 500 人、事前イベント「子ども灘山探検隊」に 56 人、当日の「灘山ツアー」に 40 人と全体を通して盛況であった
- ・兵庫県の準姉妹県であるフランス・アヴェロン県からピエール・マリー・ブランケ氏（アヴェロン県議会副議長）とヤスミン・ママ氏（マイクロポリス昆虫博物館館長）が来日し、井戸敏三兵庫県知事への表敬訪問、当日のフォーラム、終了後のレセプションと知事会食、翌日の博物館視察と記念植樹に出席

(5) 入館者数等

期間中のビジター数=74,409 人、 観覧者数=36,654 人

（うち有料入館者=10,654 人、うち学校団体数（人数）=132 校（11,930 人））

■ マーケティング タスクフォース

（1）「ひとく手帖 2009」の広告協賛での印刷

広告協賛いただいた団体等の数は、56 団体で、広告協賛費は 128 万円となった。

■ グローバル・プログラム タスクフォース

（1）国際シンポジウムの実施

1) 2008 年 4 月 25-26 日 G8 環境大臣会合記念シンポジウム 於：人と自然の博物館

（2）外国との連携

1) マレーシア・サバ州

<ボルネオ ジャングルスクール>

・2008 年 7 月 25 日-8 月 1 日 ボルネオジャングルスクール（サバ大学熱帯生物学保全研究所との連携事業） 於：マレーシア・サバ州

<JICA 関係>

・2008 年 12 月 7 日 JICA カウンターパート研修：マレーシア・サバ州 BBEC 関係者 於：人と自然の博物館

・2009 年 2 月 10-15 日、3 月 3-4 日 JICA カウンターパート研修：インドネシア国立生物学研究センター研究員ほか 於：人と自然の博物館

・2009 年 2 月 10 日-3 月 5 日 JICA 事業「生物学研究センター標本管理体制及び生物多様性保全のための研究機能向上プロジェクト」 カウンターパート研修受け入れ 於：人と自然の博物館他

<共同調査>

・2008 年 11 月 9 日-20 日 ショウガ科植物にユニークな性表現 flexistylis の調査 於：マレーシア・サバ州

2) フランス・アヴェロン県他

<国際フォーラム>

・2008 年 10 月 4-5 日 自然の再生と共生国際フォーラム：フランス・アヴェロン県副議長、マイクロポリス館長 於：淡路夢舞台国際会議場、人と自然の博物館

<共同展示>

・『昆虫記』刊行 100 年記念日仏共同企画「ファーブルにまなぶ」 於：人と自然の博物館

3) 中国・雲南省

<共同調査>

・2008年6月15日ー6月28日 科研費による海外調査 於：中国・雲南省

■ 環境学習推進 タスクフォース

(1) 学校との連携授業の実施・教材開発とその活用

- 1) 小学校（高砂市など）、中学校（県立大附属など）、高校（三田祥雲館、有馬高校、クラーク記念国際高校など）との連携
- 2) 化石公園を生かした教材開発（三田市教育委員会 理科部会）
- 3) 教職員セミナー（丹波）の内容をもとに教材開発（篠山市中学 理科部会）

■ 博物館ネットワーク構築 タスクフォース

(1) 他館との連携事業の実施

NPO西日本自然史系博物館ネットワーク（4件）、サイエンスミュージアムネット、自然史博物館における標本情報発信に関する研究会、佐用昆虫館（4件）、展示への協力（2件）の合計12件と連携事業を行った。

(2) ひとつはく主催事業への博物館等の参画推進

「丹波竜フェスティバル」に6館、「ひとつはくフェスティバル」に10館の参画があった。

■ 情報システム更新 タスクフォース

(1) 博物館の情報システムの更新推進

更新にあたっては、現行システムの課題を抽出して、その課題が解消するよう対策を検討・実施した。

- ・ひとつはく資料データベースのホームページ公開
- ・ランニングコスト削減(18年度予算に対し概ね25%削減)
- ・迷惑メール除去システムの導入
- ・大型ディスプレイの活用による展示システム等の充実

■ フェスティバル タスクフォース

(1) ビジター数 22,250人（前年から約7,000人増）。

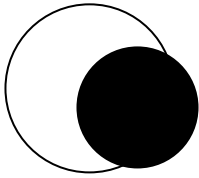
(2) 後援・協賛団体 7団体。

(3) 他団体・グループなどの参画

ミュージアムワールドに30団体、ステージに吹奏楽部が5校とチアリーディングが1校、まんぷく屋台（飲食系）に7団体の参画があった。参画総数43団体。

(4) ひとつはくワールド（ひとつはくによるパフォーマンス）の実施

ひとつはくの館員による「恐竜〇×クイズ」、「虫放天 ふたたび!」、「ひとつはく採れ取れビンゴ（植物編）」、「にがお絵師『ちんげんさい』」など。



平成 20 年度事業報告

人と自然の博物館では、その活動内容をよりわかりやすくかつ明確にするために、平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けている。中期目標は、いわば博物館の行動の指針となる大項目であり、これが全部で 9 項目設けられており、それぞれに達成を目指すべき目標値（指標）が設定されている。そして、この中期目標の各項目の下位項目として「措置」が設定されている。措置では、中期目標の達成と博物館活動の活性化に資する具体的な項目について、その行動の方針と、具体的な数値目標が設定されている。

次ページ以降の図表および解説は、中期目標の各項目に即して、平成 20 年度の博物館の活動内容とその自己評価、および平成 21 年度の事業方針を整理したものである。また、中期目標を支える措置の項目については、それぞれについての目標値・実績・達成度（%）を示した。

なお、平成 19 年度に中期目標と指標、および措置について、平成 14 年度から平成 18 年度の活動成果をふまえて、さらに社会のニーズへの対応を考慮して修正を行った。平成 20 年度は、平成 19 年度の実績や達成状況、博物館の将来構想を吟味したうえで中期目標と措置の最終案を設定し、それに従って事業を進めた。

1 研究

研究・
シンクタンク
推進室

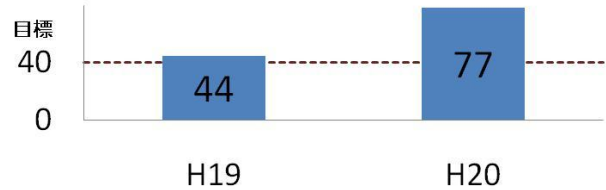
兵庫から世界を対象に自然・環境に関する調査研究を行い、その成果を新しいプログラムやコンテンツ開発等の事業にフィードバックさせます。

1-1 学術論文数

学会等の査読を経て採用された学術論文数

中期目標：40本/年

平成20年度：77本(193%)

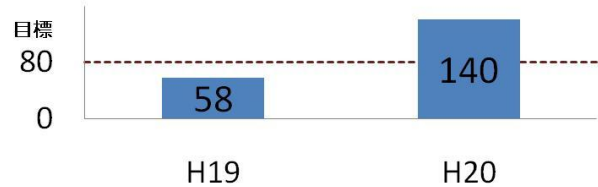


1-2 一般向け著書数(総説・その他)

自費出版を除く一般向け著書、雑誌・新聞等の執筆数

中期目標：80本/年

平成20年度：140本(175%)



平成20年度の取組みについて

全ての博物館活動の基礎となる「自然・環境」また「人と自然の共生」に関する研究を進め、その成果を学会誌等に研究員あたり最低年間1報発表し、さらに一般県民にそのエッセンスを易しく解説する一般向け著書にも積極的に投稿することを目標に掲げました。

平成20年度の達成状況と自己評価

学術論文また一般向け著書の公表数は、いずれも目標値を大きく上回りました。特に一般向け著書に関しては昨年度の3倍近い140件の公表となりました。目標値を引き上げるべきなのかもしれません。ただ学術論文・一般向け著書数は、研究員による偏りが見受けられ、最低限の目標が個々の全ての研究員において達成されたわけではありませんでした。

平成21年度の取組に向けて

最低限の学術論文また一般向け著書の公表が、博物館の総体としても、また個々の全ての研究員においても達成されるよう、研究助成金の獲得にむけての勉強会の開催、また学術論文のダウンロード環境の整備に取り組みます。個人研究・部門研究の推進はもちろんのこと、研究部横断的な課題に取り組む、新たな「総合共同研究」の立ち上げも目標とします。

2 資料

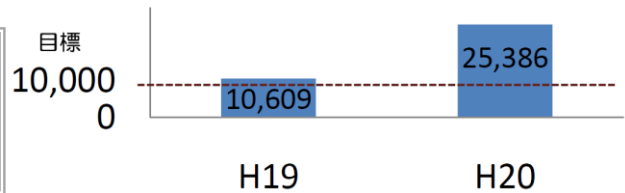
質の高い特色ある資料の収集を行い、学術利用のみならず「**演示**」への利用を積極的に推進します。

2-1 資料の登録点数

「ひとはく資料データベース」への年間登録件数

中期目標：10,000点/年

平成20年度：25,386点(254%)

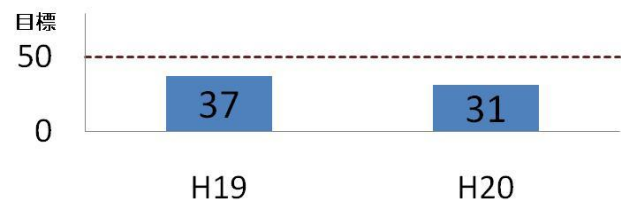


2-2 資料の利活用件数

資料の館外利用件数(貸出資料件数・館外展示件数)とマルチメディアデータ等の提供件数の合計

中期目標：50件/年

平成20年度：31件(62%)



平成20年度の取組みについて

博物館情報機器のシステム更新にあわせ、収蔵資料および環境情報の収集・保存・利活用のシステム整備を行いました。研究員自らの資料収集、藤本コレクションなど県内外の自然史資料の受贈手続きを積極的に推し進めました。これらの資料や情報は利活用されて初めてその意義を発揮することから、登録件数だけでなく公開件数やその利活用の件数もその目標にあげました。

平成20年度の達成状況と自己評価

収蔵資料の登録点数は目標を大きく上回り、植物・昆虫標本を主として新たに2万5千点の登録を行いました。登録資料は、地球規模生物多様性情報機構 (Global Biodiversity Information Facility, GBIF)により、全世界からの閲覧が可能となりました。ただ、博物館資料の貸し出し件数・館外展示・情報の貸し出し件数などの「利活用件数」、すなわち学術利用以外の普及教育用の「演示」への活用は低調のままでした。

平成21年度の取組に向けて

資料の収集・受贈・整理登録について分野に偏ることなく継続する。博物館資料・環境情報の利活用件数を増やすため、情報のインターネットによる公開や、県民や専門家にとって魅力的かつ重要なコレクションの充実を図ります。一方で、演示をはじめとする環境学習などに有用な教材となる「資料」の整備を進めます。また地域住民や行政にとって有用な資料・情報が博物館に存在することの「広報」や「貸し出す仕組み」を整備します。

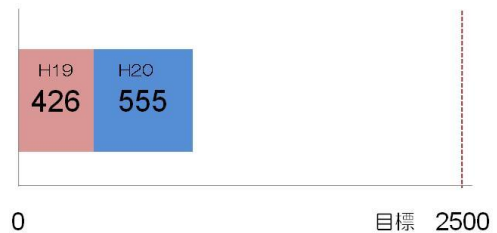
3 生涯学習の支援

「演示」手法を最大限に活用し、未体験者の来館と団体利用者の個人再来館を促し、参加者数・参加者層を拡大します。

3-1 ビジター数(総利用者数)

本館ビジター数、共催事業参加者数、館外展示観覧者数の合計

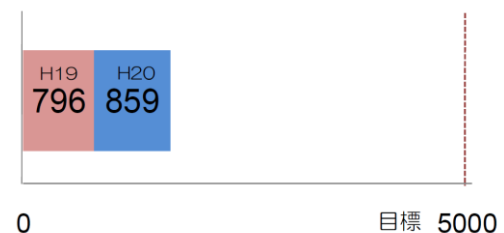
中期目標：2,500 千人/5年
平成20年度：555 千人



3-2 来館団体数

来館幼稚園・保育園、小学校、中学校、高校、大学、一般団体数の合計

中期目標：5,000 団体/5年
平成20年度：859 団体



平成20年度の取組みについて

4月の「ひとはく恐竜ラボ」オープン、9～11月の「ファールにまなぶ」展などによる集客増に加えて、館内でのオープンセミナーの開催回数を増やしました。団体向けには特注セミナーを積極的に広報して、年間527講座(前年度329講座、前年度比160%)を開催しました。とくに「ファールにまなぶ」展の期間中には「ファールトーク」と称して多数の団体向けに特注セミナーを実施しました。

平成20年度の達成状況と自己評価

ビジター数は55万人を超え、前年度の42.6万人を大きく上回りました。本館ビジター数も増えましたが、館外での共催事業の積極的な展開、丹波の恐竜化石関連の諸施設でのビジター増が効果を上げています。来館団体は、前年度に比べて一般団体が487団体から551団体に(113%)、学校団体が309団体から318団体に(103%)それぞれ増えています。博物館での企画展や「丹波の恐竜化石」の効果が現れたと分析しています。

平成21年度の取組に向けて

「丹波の恐竜を知ろう」「竜と獣の道」「初夏の鳴く虫と巡回展」「コウノトリのいる風景」などの企画展を広く広報して来館者増に努めます。さらに、館外でのイベント・セミナーも充実させてビジター増につなげます。年間を通じて、「ひとはく新聞」「ひとはくレター」のほか、報道向けの広報や他施設との連携を深めることで広範囲にひとはくの活動を紹介していきます。

また、「ひとはく手帖」に各研究員の特注セミナー一覧を分野別に掲載することで、わかりやすく紹介してビジター数確保、団体数の確保に努めます。

3 生涯学習の支援

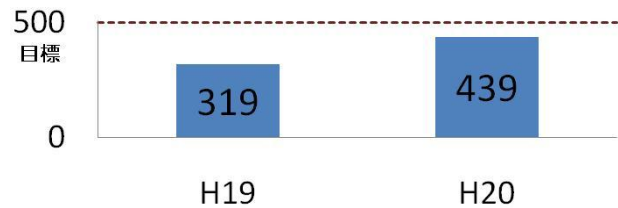
生涯学習
推進室

段階的・連続的な学習プログラムを提供し、地域研究員・連携活動グループを育成します。これらの「担い手」や他団体との連携を促進し、博物館事業の拡大を図ります。

3-3 地域研究員・連携活動グループ登録者数

地域研究員と連携活動グループ登録者数の合計

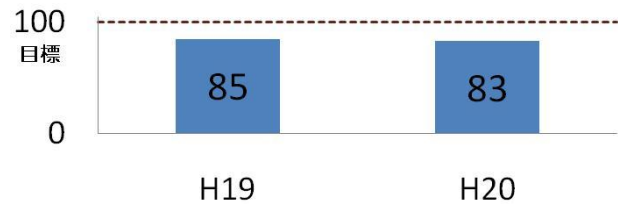
中期目標：500人(H23時点)
平成20年度：439人(88%)



3-4 他団体との連携プログラム数

共催事業、協力事業、後援事業、館外展示件数の合計(地域研究員・連携活動グループによるものを含む)

中期目標：100件/年
平成20年度：83件(83%)



平成20年度の取組みについて

共生博物館地域研究員養成事業として第4回「共生のひろば」を開催するにあたり、従来の発表会に加えてポスター・作品展示を企画展示室で行う「共生のひろば展」を約二か月間実施し、市民による調査・研究・活動の成果の発表の機会を拡充しました。また、「共生のひろば」を神戸大学との連携によるJST助成事業「地域科学技術理解増進活動推進事業『地域ネットワーク支援』」の一環として開催し、外部資金の導入を図りました。

平成20年度の達成状況と自己評価

「共生のひろば」発表会には、発表者と聴講者を合わせて300名の参加があり盛況でした。「共生のひろば展」は、長期にわたって作品展示ができ、出展者に好評でした。新規登録は地域研究員4件、連携活動グループ2件とやや低調でしたが、他団体との連携プログラム数は共催44件、協力26件、後援4件、館外展示10件で、このうちひとつは連携活動グループとの協働プログラムは10件と、充実しつつあります。

平成21年度の取組に向けて

地域研究員養成事業は、昨年度に引き続き「共生のひろば」発表会および「共生のひろば展」を、内容のさらなる充実を図りながら実施します。また、COP10の開催に合わせて、JSTの『地域ネットワーク支援』事業を活用しながら、生物多様性に関する県民・市民ネットワークの形成に向けた活動を進めます。県民・市民グループの活動のさらなる活性化と、グループ間の交流の円滑化を図ります。

4 シンクタンク活動の支援

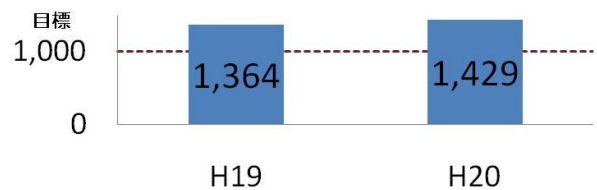
自然・環境に関する県政課題に対して、適切な助言や提言等を行います。また、企業や行政団体等のニーズに応え、先駆的な調査研究を積極的に受託します。

4-1 県政・市町行政に対する貢献度

国・県・市町関連の委員会及びプロジェクト参画数

中期目標：1,000件/年

平成20年度：1,429件(143%)

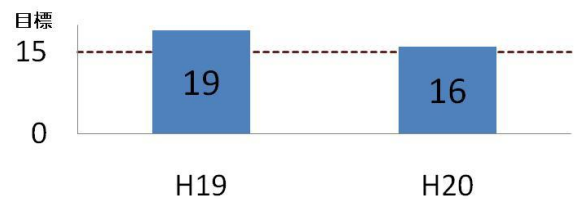


4-2 受託研究件数

調査研究受託契約件数

中期目標：15件/年

平成20年度：16件(107%)



平成20年度の取組みについて

県また国関連部局の委員会・審議会等への学識経験者としての参画を進めました。関連部局・施設、また企業とともに地域の問題を解決する受託研究の目標獲得件数を15件に設定しました。

平成20年度の達成状況と自己評価

博物館研究員の県政関連の委員会・審議会等への学識経験者としての参画数は341件にのぼり、それに関連して博物館に来訪する関係者は昨年度を上まわり1429名に達しました。博物館の研究をはじめとする各種の事業が行政施策に生かされ得る、第一段階は達成していると考えられます。受託研究に関しても目標値を超えて16件を達成しました。

平成21年度の取組に向けて

博物館の各種の事業が行政施策また県民の活動に生かされ得る第一段階は達成していますが、実際に県政また県民グループの活動がそのプランに沿って具体化されているかを検証する必要があります。外来種問題対応のシステムの確立、生物多様性兵庫戦略の地域での具体的な活動を進めます。またこの目標達成のための財政基盤の確保として、受託研究の獲得を進めます。

5 マーケティング・マネジメント

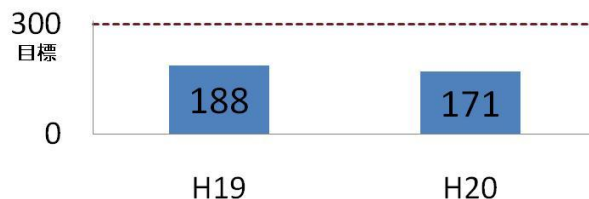
企画調整室

情報化社会に対応した情報提供を拡大し、広く県民の博物館事業への理解を醸成するとともに、博物館を活用する気運を高めます。

5-1 ホームページアクセス件数

ホームページに対するアクセス件数

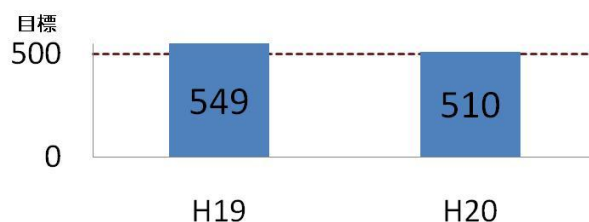
中期目標 : 300 千件/年
平成 20 年度 : 171 千件(57%)



5-2 メディア等出演件数

新聞・雑誌等記事掲載件数、テレビ・ラジオ等への出演件数の合計

中期目標 : 500 回/年
平成 20 年度 : 510 回(102%)



平成 20 年度の取組みについて

「恐竜化石」、「フェアブルにまなぶ展」、「生物多様性」のそれぞれの関連事業によって、メディアへ取り上げていただく機会が増えました。またホームページの更新回数の増やすこと等によって、皆さんに博物館の存在を知っていただくよう(知名度の向上)に努力しました。(なお知名度については、具体的な調査等は実施できませんでした。)

平成 20 年度の達成状況と自己評価

「恐竜化石」に関連した新事実の発表や展示会や、「フェアブルにまなぶ展」、「生物多様性」の関連した展示やイベント、シンポジウムなどが新聞に掲載されたり、テレビで報道されるなど、メディア等への出演件数は目標値に達したものの、前年の件数には及びませんでした。しかし前年度と同様に知名度は確実に上がっていると思われまます。一方でホームページのアクセス件数が上がらなかったのは、更新件数(変化)が少なかったためと思われまます。年度末にはホームページのリニューアルを行ったので、次年度たくさんの方に見ていただくことを期待しています。

平成 21 年度の取組に向けて

引き続き、「恐竜化石」に関する事業を展開することで、知名度の向上をはかりたいと考えています。昨年度末にホームページのリニューアルを行い、より見やすいページにしました。特にトップページでは、「ひとはくブログ」(館員からの情報)が目立つように工夫し、また館員の更新がし易くなるようにシステムを変更しました。これを期に、館報などの情報も一般の方に読み易いものにするように編集する予定です。また、「ひとはくブログ」などにおいてカテゴリーを増やすこと(内容の充実)も検討したいと考えています。

※二酸化炭素排出量について

二酸化炭素排出量は下記の換算式に基づいて算出し、前年度分との比較を行っています。

二酸化炭素排出量 = $0.36 \times \text{電気使用量 (kwh)} + 0.36 \times \text{水道使用量 (m3)} + 2.29 \times \text{ガス使用量 (m3)}$

5 マーケティング・マネジメント

企画調整室

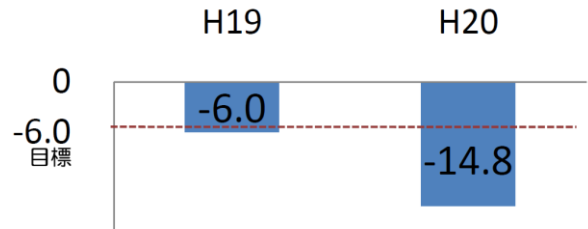
効率的で健全な博物館運営を目指します。

5-3 二酸化炭素排出量の削減

対平成 18 年度比削減率

年度目標：-6%(H18 年度比)

平成 20 年度：-14.8%

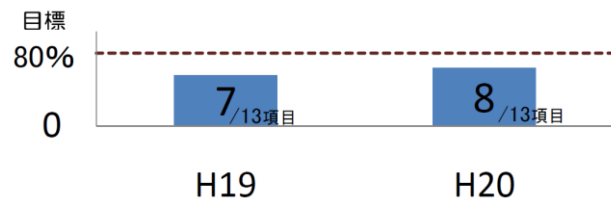


5-4 中期目標の達成度

中期目標の総指標数のうち達成した指標数の割合

年度目標：80%

平成 20 年度：62%



平成 20 年度の取組みについて

第 2 期中期目標の暫定版の「目標値の設定」を見直して正式版の中期目標を確定させました。たとえば「資料の利活用件数(年間 50 件)」、「ビジター数(総利用者数:5 年間で 250 万人)」などの目標値を引き上げたり、一方で「一般向け著書数(年間 80 本)」の目標値を引き下げるなど数値の見直しとともに指標の整理・統合を行いました。

平成 20 年度の達成状況と自己評価

電気、水道、ガスの使用量から算出する二酸化炭素排出量は、かなりの削減ができました。しかし、中期目標の総指標数のうち達成した指標数の割合(達成度)は 62%であり、年度目標の 80%には到達できませんでした。中でも「資料の館外利用件数」や「来館団体数」、「他団体との連携プログラム数」、「ホームページアクセス件数」などは前年度よりも低調であったため、特に対策が必要だと考えています。(なお外部評価委員会による評価点検については実施することはできませんでした。)

平成 21 年度の取組に向けて

目標値の達成だけでなく、新たな「兵庫県立人と自然の博物館」の基本構想や基本計画を踏まえて、ルーチン化している事業の内容・意義等を見直して行きたいと考えています。

※新たな「兵庫県立人と自然の博物館」の基本構想や基本計画について

ひとはくでは、「今後博物館は、どのようにあるべきか？」ということを有識者の方々と一緒に委員会を開いて検討しています。平成 17~18 年度には「基本構想」として、平成 19 年度には「基本計画」として検討し、それぞれ報告書に取りまとめています。